

ポスター | 2-01 外科治療

ポスター

総肺静脈還流異常 その他

座長:根本 慎太郎 (大阪医科大学)

Thu. Jul 16, 2015 4:50 PM - 5:20 PM ポスター会場 (1F オリオン A+B)

I-P-161~I-P-165

所属正式名称: 根本慎太郎(大阪医科大学外科学講座 胸部外科学教室)

[I-P-161] 当院における高位上大静脈還流型部分肺静脈還流異常症に対する手術戦略

○桑原 優大, 高橋 幸宏, 安藤 誠, 和田 直樹 (榊原記念病院 小児心臓外科)

Keywords: PAPVC, Warden, ASD

【目的】当院では上大静脈(SVC)に高位に開口する部分肺静脈還流異常(PAPVC)に対し Warden法に準じた方法を施行してきた。当院での適応は基本的に PVの SVC流入部上端(PVU)から SVC-RA junction(SRJ)の距離をもとに判断している。今回対象患者と手術戦略、成績に関して検討した。【対象】2000/12月から2014/2月に加療した SVC還流型 PAPVC 38例中 Warden法に準じて修復した16例。手術年齢中央値は7.9歳(1-41歳)、手術時体重中央値24.9kg(8.5-72.8kg)、心房中隔欠損(ASD)合併を13例(sinus venosus type 7例、central type 6例)に認め、PAPVRは右上 PV単独が10例、右上 PVと右中 PVが5例、右上 PVと左上 PVが1例、右胸心を1例、開心術既往を1例に認めた。Warden法を施行しなかった近位上大静脈還流型では1例を除き ASD合併を認め全例 ASDは sinus venosus typeであった。【結果】PVUと SRJ(P-S)、PVUから主肺動脈頂上部(PAU)(P-P)までの距離の平均値はそれぞれ Warden法群で 21.7 ± 6.5 mm、 3.6 ± 6.6 mm、その他心内修復群では 10 ± 2.8 mm、 20.9 ± 6.7 mm。Warden法群では PVは ASDを介して Goretex patchで左房へ reroutingし6例で SVC前面を自己心膜で補填拡大(P-S 21.7 ± 2.4 mm P-P -3.9 ± 5.7 mm)、1例で SVCを graftで interpose(P-S 35.6mm P-P 11.8mm)。1例に三尖弁形成術を併施。平均観察期間 4.3 ± 3.4 年(0.9-10.5年)で急性期・遠隔期死亡は認めず。観察期間中 SVC狭窄や PV狭窄は認めず全例洞調律で経過した。【結語】当院における Warden法の手術成績は良好であった。SVC前面を自己心膜で拡大、または人工血管で interposeする Modified Warden法に関しては P-Sと P-Pの距離を考慮し、解剖学的に smoothな rerouteが困難な際や吻合部に張力がかかる例(再手術症例など)で試みる必要があると思われる今後長期的な検討が重要である。また central typeの ASDは高位型でのみ認めており同 typeでは PVreroute経路が長くなるため、今後 PVO発生に留意する必要があると考える。